

# *Native Son* を通して見た Wright の黒人心理

粕谷 範子

Richard Wright (1908—1960) は、Mississippi 州の Natchez の町にある農場の棉作小作人の息子に生まれたので、南部における人種問題に悩まされていた。自分の体験などを題材として、主に抗議文学を書いた黒人作家の一人である。

1920年代に America では、Negro Renaissance が起こり、Hurlem が文学活動の中心となり、第一次世界大戦後の人々の気持ちが、文明開化によごされない昔にもどりたいたいと思ひ、黒人を再認識する。そこで黒人は、それを利用し黒人の持ち味を爆発したのである。Jazz や黒人たちが構成し上演した劇が好評であった。

1929年から1939年の大不況期は、America の全階層に深刻な影響を及ぼした。その最大の犠牲者は、黒人大衆であった。このような、めま苦しい時代背景を念頭において、Wright の作品における黒人心理を探ってみたい。彼の作品は、二つに分けられる。America (1935—1945) を主題とした作品と、France (1950—1960) に移ってからの作品である。“The Great Migration” (1916—1935) において、黒人の多くは、農村から都市へ、南部から北部へ、棉つみから工場での仕事やヨーロッパ人の対応へと、自由と新鮮で強烈な刺激を求めたのである。そして同時に中世的 America から近代的 America への慎重に考えられたあげくの脱出でもある。Wright もその一人である。しかし私たちとは違い、彼の場合は、血みどろな脱出に脱出を重ね、意識的に努力して Outsider にならねばならなかったのである。

彼の作品中には、怒り、Frustration、絶望、そして、暗黙のうちに白人に対して、黒人をとり囲む環境や社会に対して抗議が存在している。しかし France に移ってからの作品の中には、総てに対しての抗議がし

だいに薄れている。America を主題としている作品に、*Uncle Tom's Children* (1938), *Native Son* (1940), 及び *Black Boy* (1945) がある。France では、*God That Failed* (1951), *The Outsider* (1953), *The Long Dream* (1958), 及び、*Eight Men* (1961) がある。私は、これらの作品の中から、Wright の代表作である *Native Son* を中心に、America を主題とした他の二篇と共に、America 社会に存在する黒人心理を研究したい。

主人公である Bigger は、flying pan で鼠を殺す場面で一日を迎える。このことは、彼のこれから引き起す事件を予期した出来事である。彼の一日は、死で始まり死で終る波乱万丈な一日である。黒い皮膚をしているために白人の中で、恐怖におのき生きのびるのである。最大の恐怖は、自己認識である。白人が Bigger の自由を奪い、彼に frustration を起こさせていることを知りながら、その事実を認めてしまえば、それはそのまま根深い自己嫌悪を認めることになる。それで自らの憎悪や反抗を、他の黒人、映画、踊りなどに向けて、一時的に自分の ego をなだめている。恐怖の中に、黒人は存在するのである。彼らの生活は、白人に対して絶対服従なのである。

Every time I get to thinking about me being black and they being white, me being here and they being there, I feel like something awful's going to happen to me.<sup>(1)</sup>

同じ人間でありながら、総てに差別を受け人間として扱われないのである。Bigger は、白人なら受ける必要のない様々な悲惨な出来事に直面し悩まされる。黒人に与えられるものは何一つない。恐怖のみである。Bigger は、恐怖を感じた時に、自分の抑圧を忘れさせてくれる程の強烈な行動で心の中を襲う恐怖をかき消すことを望むのである。そのために黒人同志で喧嘩をしたりする。それは彼にとって日常茶飯事である。彼は、これから自分に起こる運命を自から悟り、それを選択したのである。黒人にとって暴力は、恐怖と憎悪に対する補償行為にすぎない

のである。彼らからみて人生の本質は、権力と暴力なのである。

多くの黒人は、宗教を尊ぶことで自分の心を抑圧していた。しかし、Wright の宗教観は、*Black Boy* において、次のように述べられている。

Perhaps if I had caught my first sense of life from the church I would have been moved to complete acceptance, but the hymns and sermons of God came into my heart only long after my personality had been shaped and formed by unchartered conditions of life. I felt that I had in me a sense of living as deep as that which the church was trying to give me, and in the end I remained basically unaffected.<sup>(2)</sup>

南部で生活した体験が、身体や心の中まで入り込み、純粋に宗教を信じる心を持ち合わせていなかったのである。彼は、ひたすら生きるために、自分の才覚だけを頼りにしてきたのである。

Dalton 家は、白人の象徴である。Bigger は、Dalton 家に一步足を踏み入れると、白髪の子、白い布をまとった顔も髪も完全に白い夫人、それに白い猫というように総てが“白”であり、彼は恐怖の渦の中に巻き込まれていくのである。Dalton 氏は、黒人地位向上全国協会の支持者でありながら、その反面黒人に高賃金で貸家をしている黒人大衆には見えない影なのである。この家族こそ America 黒人に対する盲目性を象徴している。白人は常に自分の思い通りに事を運ぶのである。黒人の気持ちを少しも考えずに、「黒人とは、頭のない言いなりの動物だ。」と、頭の中で黒人を形成しているのだ。

Mary と Jan のやさしさも、Bigger にとっては、逆に無言の憎悪をかきたてるばかりである。彼は、生まれてから一度も白人から、やさしい言葉をかけられたことがなく、母親のお腹にいた時から、黒人の生き方を教え込まれていたのです。躊躇するばかりである。それどころか、二つの白い壁に圧迫され、Bigger は、息苦しく悩まされていれのである。

Mary の死は、Bigger に英雄的な存在をもたらしたのである。彼女の死は、偶然的な事故であり、自然の現象である。Bigger はもちろんだれの罪でもない。America 社会がもたらした罪なのである。Bigger は、America 的所産であり、社会的矛盾の落とし子なのである。黒人はそれぞれ自分の存在自体が罪であるように感じさせられて育成されたのである。

偶然にしても Bigger が Mary を殺害したことは事実である。しかし彼は罪の意識を少しも感じないのである。逆に屈辱や恐怖の意識が薄らぎ高揚した解放を痛感するのである。Mary の存在は、彼に大きな恐怖をもたらし、自動的に大きな暴力を作り出させたのである。Bigger の行為は、事故でもあり、同時に事故でもないのである。彼は、絶えず支配的文明のきらびやかさに依って苦しめられて生きてきたので、殺人を犯すことによって、己れの日常生活の境界を突き抜けたのである。彼の今までの悲惨な生活が生みだした圧力を象徴的に破壊したのである。自分の意志が、始めて解放されて、わずかながらの自由な気持を獲得したのである。

**He had murdered and had created a new life for himself.  
It was something that was all his own, and it was the first  
time in his life, he had had anything that others could not  
take from him.<sup>(3)</sup>**

今までとは違い、自分自身を認識して、人間本来の新しい生活を自分の手で創造したのである。彼の犯罪は、彼を世間の中につなぎとめてくれる錨の役割をしたのである。

America に在る黒人は、法律、原則、制度が自分たちに適用されないことを、自覚している。 *Uncle Tom's Children* の “The Ethies Of Ling Jim Crow” では、特に America の無秩序を強調している。

**The boss and his twenty-year-old son get out of their car**

and half dragged and half kicked a Negro women into the store. After a few minutes, I heard shrill screams coming from the rear of the store. Later the woman stumbled out, bleeding, crying, and holding her stomach. When she reached the end of the block, the policeman grabbed her and accused her of being drunk. Silently, I watched him throw her into a patrol wagon.<sup>(4)</sup>

警官も店主も、手はず通りのように、なんとも思わず黒人女性に乱暴する。そして、警官は、被害者である黒人女性を警察に連行する。それに反して、Bigger は、Mary に乱暴さえしていないのに死刑の宣告を受けるに至るのである。いずれも皮膚の色だけで善悪決定しているのである。America において法律は、存在しないのである。

黒人には、神への信心や酒に酔って“現実逃避”するしか道はなかったのである。彼らにとって、自由な世界、可能な世界、そして恐怖なき世界は、空想の世界だけである。Bigger は、そんな生活に絶えられず、自分だけの倫理、道徳、さらには人格の形成の必要性に気づくのである。彼は、他人の不可能な事を、現実に関自分の手で成し遂げたのである。

To Bigger and his kind white people were not really people, they were a sort of great natural force, like a stormy sky looming overhead, or like a deep swirling river stretching suddenly at one's feet in the dark.<sup>(5)</sup>

逆に黒人たちから見て白人は人間ではなく白人は大きな“自然力”なのである。黒人たちは恐れようと恐れなかりようと、一日をその“力”と共に暮さなくてはならないのである。だれもが、“白い力”に抵抗することを夢想したが、現実に関直視すると夢想は、無惨に崩壊せざるを得ないのである。

He felt that someday there would be a black man who would whip black people into a tight band and together they would act and end fear and shame.<sup>(6)</sup>

Bigger は、Mary 殺害の後に、深く自分を再認識して、心の奥底にいつかは黒人種が行動に出て、恐怖と屈辱を終らせる日が来るのを信じていたのである。しかし黒人であるために白人たちの生活を生きねばならないのである。白人の頭の中に存在する黒人でなければならぬのである。Bigger の愛人である Bessie もその中の一人である。愛人とはいっても黒い皮膚をしているものには、愛が存在するよりはないのである。Bigger と Bessie との間は、男が酒を提供して、その代償として女が、肉体を与える関係にすぎないのである。黒人である Bigger は、心の底から人を愛したことは一度もなかったのである。

Bigger は、緑色がかった明りの中で Mary を殺害して、彼女の首を切断する。ついで炉の中で燃焼させる。続いてその大邸宅とは対象的な鼠のうろつく廃屋で自分の身を守るために Bessie の頭を、レンガでたたきつぶすのである。数日のうちに、二人の女性を殺害することによって Bigger は、解放感ばかりでなく今までの盲目性を明らかにしたのである。以前の Bigger は、白人ばかりでなく黒人にも目を閉ざしていたのである。しかし Mary と Bessie 殺害によって精神的な反逆が実現化され目を開くのである。Dalton 家と、白人の盲目性を利用して、偶然的な Mary の事故を計画的に共産党員の Jan に罪をきせるのである。白人は、黒人の能力では、Mary の殺害は当然ありえないと考えているのである。しかし彼にとっては、最も意義深い出来事である。誰もが想像出来ないことを彼は成し遂げたのだから、一種の充実感さえ感じられるのである。

It was when he read the Newspapers or magazines, went to the movies, or walked along the streets with crows, that he felt what he wanted: to merge himself with others and be

a part of this world, to lose himself in it so he could find himself, to be allowed a chance to live like others, even though he was black.<sup>(7)</sup>

普通の黒人たちよりも Bigger は、強烈な自我の持主である。「黒人の最大の恐怖は、自己認識である。」と知りながら、Bigger は、すでに自分自身を悟っているのである。しかし、彼の望んでいる事は、人間本来だれもが思うことである。黒い皮膚の持主だけが、望んではいけない事ではないのである。彼は、人間であるからこそ人と溶け合って世界の一部になり、自己を見い出せるようにその中に自己を没入させることを望むのである。黒人にも人と同じように生きる機会を与える必要があるのだ。

Wright の *Uncle Tom's Children* の中の “Long Black Song” で彼は、 “The white folks ain never gimme a chance! They take yo lan! They take yo freedom! They take yo women! N then they take yo life!”<sup>8)</sup> と述べている。総てが白人には有利である。黒人にとって生涯追求するのは “自由” であろう。自由を獲得するために Bigger がとった様々の手段は、彼の置かれた環境によって決定されるのである。しかし、白人は、自由ばかりではなく、女性も生活も総て黒人から取り上げてしまうのである。Dalton 氏もその一人にすぎないのである。彼は「黒人に chance を与えたい。」といいながら、South Side 地区に大きな不動産を所有しており、黒人 ghetto を現在のような状態に止めておく事に投資しているのである。彼は、自からの目で実際の黒人の心を見たことが、一度としてあったろうか、彼は、自分の狭い目で、黒人の外面をただ見ていたにすぎないのである。Bigger よりも、むしろ Dalton 氏こそ、無実であると同時に有罪なのである。

どの新聞記事においても、Mary 殺害について書かれているが、Bessie の殺害には、触れようともしていないのである。白人にとって、黒人女性の死は、どうでもよいことである。Bessie の死体は、Mary 殺害の一つの証拠物件にすぎないのである。Bessie は、白人に命じられた通

りの生き方をしてきた。恐怖と屈辱の存在する白人に絶対服従してきたのである。そして殺された後ですらもなお、白人に支配され利用されるのである。Bigger は、Mary 殺害に関しては、何も感じなかったが、Bessie について、すまない気持ちと、彼女をあわれむ心で満たされていたのである。

There was the fear of death. He had to go forward and meet his end like any other living thing upon the earth. The dread of being black and unequal would be forgotten; that even death would not matter, that it would be a victory. This would have to happen before he could look them in the face again.<sup>(9)</sup>

Bigger は、皮膚の色のために、America 社会と戦い、敗北していくのである。彼は、死への恐怖があったが、真の悲劇は、彼が憎悪の中に死ぬという事なのである。彼は、人間としての自由、愛、信頼を求めて、最終的に彼を打ち負かしてしまう敵意に満ちた社会環境と戦ったのである。Bigger 個人のためではなく、America 文化のゆがみが強制した疎外環境に置かれた黒人たちのために戦ったのである。

生まれて始めて、白人が Bigger にとって人間となるのは、彼の弁護士 Max である。人間的な結びつきをしたのである。黒人であるために白人は敵であると信じてきた Bigger は、殺人を犯さない限り、Max や Jan とは、出会えなかったであろう。Max は、Bigger の内にひそんでいるものを、教えてくれたのである。

With this new sense of the value of himself gained from Max's talk, a sense fleeting and obscure, he tried to feel that if Max had been able to see the man in him beneath those wild and cruel acts of his, acts of fear and hate and murder and flight and despair, then he too would hate, if he were



they, just as now he was hating them and they were hating him. For the first time in his life he felt ground beneath his feet, and he wanted it to stay there.<sup>(10)</sup>

Max のすばらしい弁論によって、Bigger を生んだ America 社会が、黒人存在の追求や、動機なき殺人原因の追求で鋭く分析されて、告発されてゆくのである。そんな Max に Bigger は、人間的な信頼をいただくのである。

黒人には、人間本来の本当のやさしさ、思いやり、喜びが欠如している。そういったものは、彼らの周囲には、不必要なのである。伝統は貧しく、協調性や情感のきずなも、もろいものでしかない。生活も考え方も乏しいのである。それらの原因は、総て彼らを包む環境のためである。America 社会がもたらした人種差別のためである。

He would have gladly admitted his guilt if he had thought that in doing so he could have also given in the same breath a sense of the deep, choking hate that had been his life, a hate that he had not wanted to have, but could not help having.<sup>(11)</sup>

白人たちは、Bigger の犯罪の事実を知り、彼を殺すことばかり、考えている。彼が犯罪を犯す前に、いやという程感じさせられてきた憎悪感、屈辱感、そして恐怖感については、絶対に知ろうとはしないのである。Bigger は、何が自分を殺人に追いやったのか、民衆に、少しでも理解してほしいだったのである。

Max は、これらを、資本主義と白人至上主義の America 社会構造が生み出したものであると告発していくのである。

But what I killed for, I am! It must've been pretty deep in me to make kill! I must have felt it awful hard to mur-

der.<sup>(12)</sup>

Bigger は、決して人を殺したくて殺害したのではない。South America で20年間生きてきた彼にとっては、自分の身を守るためにやらねば、自分が殺されるからである。黒人の一日は、波乱万丈で緊迫している。彼のとった態度は、本能的な行動なのである。

この作品は、「恐怖」「逃走」「運命」から成立していて、黒人の内に潜む心理が、Bigger によって描かれている。皮膚が黒いために運命は悟られている。毎日、恐怖や屈辱に服従して、自分の心理を抑圧して生きのびている。

Dalton 家での Mary の窒息死、それから彼女の首を切断して、赤い炎の中で切断された身体を燃焼させる。続いて愛人の Bessie をレンガでたたきつぶして、真暗な通風孔へ彼女の死体を棄てる。彼は、アパートの屋上の雪と氷におおわれた給水塔の上で、水を浴びせられ、身体も凍って墜落する。数日間のうちに、次々と暗黒の中で、血生ぐさい身の震えさせられるような事件を起こすのである。これらは、本来の人間に可能なことだろうか。黒人である Bigger は、やはり人間ではなく獣なのだろうか。それは、America での今までの生涯の中で、不安と恐怖と憤りと絶望との体験が、彼に、これらの息もつかせないような事件を引き起こさせたのである。

Naturalism の流れを受けつぐものとして、*Native Son* と *An American Tragedy* (1925) は、しばしば比較される。*An American Tragedy* は、Theodore Dreiser (1871—1945) が Clyde という青年の生いたちを克明に描き、彼が上流階級に加わる唯一の道である資産家の娘との結婚を成し遂げるために、殺人を犯して死刑に処される過程を追求した作品である。それに反して、*Native Son* は、Wright の分身でもある青年 Bigger が、突然にしかも偶然に大金持の一人娘 Mary を殺害する。両者とも殺人を犯したことには、変りないのである。しかし Clyde にしても Bigger にしても、追いつめられていたのである。それは何か。それは、彼らを取りまく環境であり、人間性を失った America 社

会の抑圧である。

Clyde は、計画的に殺人を犯すが、Bigger の場合は、ふとした過失なのである。黒人ならば、だれもがいただくことを Bigger は、成し遂げたのである。恐怖の殻を破らない限り人間性は、味わえないのである。しかし、黒人が、人間性を味わうことは、死を待つことでもある。多くの黒人は、恐怖と屈辱を破棄することを望み、白い力を打破することを夢想しながら神を信心しているのである。だれもが、自分の生命は、尊いから夢想で、終ってしまうのである。

Wright は、自分の生命も尊いが夢想で終りにしなかったのである。彼には、強い武器があったのである。

I stood up, trying to realize what reality lay behind the meaning of the words... Yes, this man was fighting, fighting with words. He was using words as a weapon, using them as one would use a club.<sup>(13)</sup>

黒人にとっては、白人である Menchen が、非難されているのが不審に思われるのである。彼は、読める限りの数多くの本を読み、言葉の背後の真相を見抜くのである。黒人は、白人と戦うには、武器も人員も白人に劣る。しかし、言葉は何よりも偉大である。それに一度に多くの白人が、読むことが可能である。非常に重要なものを、今まで見のがしてきたことに気づくのである。

Africa から強制的に America へ移住させられた多くの黒人たちは、白人文化から遠ざかった世界におしこめられ、黒人作家は、耐えきれない恐怖が怒りとなり爆発して、言葉を武器として、自分たちの民族意識を、America 文学ではなく“黒人文学”として、みんなに訴えているのだ。黒人たちの要求や希望や迫害や苦悶を表現しようと努力しているのだ。皮膚の色の違いだけで同じ人間には、変りないのである。南部に存在する人種問題は、我々外部の人種には想像もつかない程、黒人を襲ってくる。しかし、黒人は身の危機を感じる時のみに白人に抵抗するの

である。

Wright は、言葉で America 社会ばかりでなく世界中に、人種差別を問いただしているが、不合理、反抗、不平等を感じながら黒人は、最後に敗北していくのである。黒人には、勝利は不可能で、抵抗を示すのみである。

Wright の作品には、人種差別問題の解決が指摘されていない。恐怖や抑圧にとりつかれた心理状態から、America における黒人へのきびしい差別、拘束された自由、悲惨な環境をありのままに描き出しているに過ぎない。抗議小説だけで終らせるのではなく、全世界の問題として、人種差別の解決を問う方向にもっていくべきであった。黒人の抗議小説は、白人にとって、黒人に対する単なるあわれみとしか受けとられず、黒人作家は、自己嫌悪に陥ってしまうのである。Wright 自身もまさしくその一人である。彼は、South America に住む Richard Wright から、自分を守り、自由を求めて、他の黒人を見離して、自分ばかり作家の Richard Wright として France に脱出したのである。彼は、America で *Uncle Tom's Children*, *Native Son*, *Black Boy* を書いていくにつれて、一段と黒人としての自己嫌悪に陥ってしまったのであろう。彼は、自分の中に存在する黒人氣質を捨て去りたかったのである。France へと脱出してからは、文学の方向も、変貌していったのである。しかし、20年間 South America で、育成された南部気質は、果たして彼から離れただろうか。

私たちは、愛の力と、愛の悶えと、愛の恐怖がいかに多量に含まれているかということ、深く認識しない限り、その“扉”を開くことはできないのである。

## Notes

- (1) Richard Wright: *Native Son*, p. 23.
- (2) Richard Wright: *Black Boy*, p. 124.
- (3) Richard Wright: *Native Son*, p. 101.
- (4) Richard Wright: *Uncle Tom's Children*, p. 8.

- (5) Richard Wright: *Native Son*, p. 109.
- (6) I bid., p. 110.
- (7) I bid., p. 226.
- (8) Richard Wright: *Uncle Tom's Children*, p. 125.
- (9) Richard Wright: *Native Son*, p. 256.
- (10) Ibid., p. 334.
- (11) Ibid., p. 286.
- (12) Ibid., p. 392.
- (13) Richard Wright: *Black Boy*, p. 272.